大城立裕『朝、上海に立ちつくす』論
――未発表原稿との関連における「東亜同文書院」の体験

A study of Oshiro Tatsuhiro's "Asa Shanghai ni tachitsukusu": Experience of "Toadoubunshoin" with unpublished Manuscript

柳井貴士〈Yanai TAKASHI〉

キーワード：大城立裕／「朝、上海に立ちつくす」／東亜同文書院

一　はじめに

大城立裕の『朝、上海に立ちつくす――小説東亜同文書院』（以下『朝、上海に立ちつくす』と記す）は、一九八三年五月に刊行された。[1] 大城が一九四三年から二年間在学した、上海にある東亜同文書院大学での経験が本作の根底にある。『恩讐の日本』[2]の刊行準備の頃に執筆が勧められ、「十余年間ぼんやり考えつづけたあげく、日本と中国の結びつきかた、さらには他国に学校を作るとはどういうことかと、しだいに普遍的なところへ思い及び」[3]、また「今日流に考えれば、日本の大陸侵略の手先を養成したと考えることもでき、そういう考えかたの当否について」[4]考え執筆されたのが『朝、上海に立ちつくす』だといえよう。沖縄が米軍施政権下からヤマトへと返還される時期に発し、一〇余年の時間が費やされ執筆されたのである。

一九二五年生れの大城立裕は、一九四三年、沖縄県費派遣生として東亜同文書院大学予科入学のため上海へ渡った。大城は「この学校をえらんだのは、たんに学資が助かるというだけの理由にすぎない」とし、また「中国語学習に苦労した」と回想している。[5] 一九四四年春に「軍米収買」に徴用され、七月には盲腸炎手術のため徴兵検査を半年ほど延期することとなった。九月に予科を修了し、学部へ入学するも、すぐに勤労動員のため第一三軍参謀部情報室蘇北機関（揚州）に勤務することとなり、中共資料の翻訳を行った。一九四五年三月二〇日、独立歩兵第一一三大隊に入営し、蘇州、丹陽、鎮江の周辺を移動しながら訓練を行った。一九四五年の年譜をみると、「八月一五日、蘇州師団本部で幹候教育はじまる。午前中教育をうけ、正午に敗戦発表」、「八月二六日、除隊、上海へ帰る」、「九月、軍需品接収のための通訳に、同文書院学生を動員。私は第一三貨物廠に配属、呉淞、馬橋倉庫に勤務、五ヵ月間。この実務体験がとりわけ中国語の勉強になった」とある。ここに記された経験は作品内容とも重なり、そこに「虚実をつらぬ」[6]く「作家的想像力」[7]を駆使して創作された〈小説〉が本作なのである。

『朝、上海に立ちつくす』は、戦時下の上海を舞台として、「東亜同文書院」の学生、知名を中心に、朝鮮人の金井、日本人の織田、台湾人の梁たちとの関わりの中で、民族意識の有り様が議論されながら、他に沖縄、日本、中国の女性が配置され、物語が展開する。学生でありながら「軍米収買」や「蘇北機関」での役割を通して、大日本帝国下における〈日本人〉という問題が語られる。

『朝、上海に立ちつくす』でまず注目されるべきは視点人物知名雅行の「贋」という感覚である。沖縄人である知名は大城自身の観点に重なる人物といえる。「一見いかにも兵隊であった。略帽、軍服、軍靴、そして軍服の襟には真紅の台座に黄色い星が一つ、羞ずかしげにだが紛れもなくついていて、陸軍二等兵に違いなかった」と書き出される本作において、知名は「星一つの階級章がやはり贋物に見える瞬間」を抱いている。江蘇省昆山での「軍米収買」は、日本軍の権力による暴力的搾取である。その場に参加する知名たちは軍の権威と暴力を体現する存在として通訳の任務も負わされ、村人からは〈見られる〉存在となる。ここで知名は方言を聞きとれず、「贋の兵隊、贋の通訳」という認識を持つ。それは、不在の「真」という自己肯定を内在する。東亜同文書院大学の学生であるという自己認識が希求され、本作は知名のその感覚から駆動するのである。そこに「大東亜共栄圏」に組み込まれた朝鮮人、台湾人という同級生を配置することで、さらなる「真」への問いが、東京出身の織田、朝鮮出身の金井、台湾出身の梁をめぐって追求される。

黄英は先行する岡本恵徳論について、「教養小説的な「青春小説」として一定の完成度を示したが、かつて完全に日本人意識にとらわれていた過去を客観的に確認し、作者の現在の自己確認（沖縄へのこだわり）が見られない」[8]とまとめているが、件の岡本はまた「この作品は最初「民族」問題に無自覚であった主人公の知名が、さまざまな体験を経てやがて「民族」問題に自覚的になっていく、その形成過程を描いた」作品だとも述べている。[9] したがって大城自身の「現在の自己認識」の不在と、視点人物知名の「民族」問題への意識化は、戦後と一九八三年の接結点における小説家大城の〈現在形〉なのであり、「青春」時代を過ごした上海、「東亜同文書院」をめぐる思考の在り方に注目することも重要であるだろう。

本論は、これまでの先行研究では触れられなかった上海や「東亜同文書院」に関して大城が戦後早い時期に記した未発表原稿の発見と分析を出発点として、テクストの考察を行いながら、〈日本人〉や「民族」をめぐる同一性の問題を、主に金井という〈朝鮮人〉留学生や女性との関係から考察することを目的とするものである。

二、『朝、上海に立ちつくす』という〈小説〉

中国専門家養成を目指した東亜同文書院は、一八九〇年九月、根津一が上海南京路に設立した「日清貿易研究所」に始まり、一九〇〇年には「南京同文書院」（院長・根津一）が南京に出来るも、義和団事件のため同年八月に上海へ移り、一九〇一年八月「東亜同文書院」と改名した。[10] 一九三九年に大学に昇格、「東亜同文害院大学」となり、予科

一期生（書院第四〇期生）が集まった。本院には「中外ノ実学ヲ講ジテ、中日ノ英才ヲ教エ、一ニハ以ツテ中国富強ノ基ヲ樹テ、一ニハ以ツテ中日輯力ノ根ヲ固ム」との「興学の要旨」があり[11]、「日本では軽んじられていた中国語教育を徹底して重視し[12]」た。また「当初は清、のち中華民国の全域の実態を把握するために各地を徒歩で旅行する[13]」実学としての調査を重んじたが、四四期生の大城が入学したころには「〔…〕日中戦争へ突入した環境下で、フィールドワークは大幅に制約され始め、日本軍の清郷工作への従事、学徒出陣などの中、大学教育自体が成立しがたい状況とな[14]」っていた。一九四五年五月、富山県に呉羽分校を開設するも、九月、上海海格路校舎が接収され、翌年二月に呉羽分校も閉鎖し、その歴史を閉じた。

さて、ここで注目するのは、これまで言及されたことのない沖縄県立図書館蔵大城立裕未発表原稿「上海物語　月の夜がたり――義豊里の人々」（以下、「月の夜がたり」）である[15]。これはマス目のない用紙に手書きされた、表紙を含め四四枚、字数にして約二万四八〇〇字の文章である。表紙には、「「河南様御家族に捧ぐ」／上海物語／月の夜がたり――義豊里の人々――／一九四七／立裕」と記されており、書出しの原稿（二枚目）にはあらためて「月の夜がたり」とあり、「幾分少女趣味に近いかも知れないがかうして八月にもなつて、この夕涼みの縁台にゐて、十六夜の月を眺めてゐると、いつでも思ふ」思い出が主に記述されている。

【二枚目】しかしかう書出したからといつて私はたゞの暇つぶしの若いオセンチに浸つてゐるのではない。私が過ぎ去つた三年の日に、じりぐ快くも私の胸を抉つたことどもを愛情といつては大袈裟だが、親子の愛でも恋愛でも友情でもなく、それかといつて又、物値で利害関係をつながれた他人の間柄でもない、ある人と私とのほのぐと私の胸にたえず甦つてくる、冬の囲炉裏チロくと消えさうで消えがたい火のやうな印象を、そのまゝ写してみようと思ふのだ。／たゞ、昭和十八（鉛筆で「九」に訂正）年の春からのことだとはおぼえてゐるが、その他のイメーヂははつきりしない。しかし、私は時間、空間の或一瞬の裁断面の数々をそのまゝ無雑作に排列して見て、そのまゝの懐しさにひたればそれでよいのだ。

表紙に記された通り一九四七年に執筆されたのなら、この頃の大城は「戯曲」公募に応じた時期であり、散文として思いを連ねる文章は興味深く思われる。

【五枚目】その初対面の日に、ホットケーキが出たが、それで皆がハシヤイでゐたから、何となく、曰くづきの料理なのであらうとは思つたが、その後川崎からきかされて之を称してアツポ焼きといふとか、また金城さんが士官学校を出て見習士官で上海に来られた時にまた之が出たので「お得意焼か」といつてまたもや皆が活気づいたことなどもあつて、実は「アツポ」といふのは、この家の一人娘温子さんが小さい時からアツポチヤンと呼ばれて、この年一七才だが、本当かどうかは知らないが、その得意の料理だといふほどの意味らしかつた。

【一四枚目】その頃であつたかと思ふが、川崎と私が一緒に義豊里に行つた日、前に話のあつた、「生活の感激」といふ問題で温

子さんを前にして川崎と私が二階の縁側で議論したことがあつた。

このように日常生活の出来事が思いのままに書き連ねられたといえる本作は、学徒出陣した同郷の金城先輩の死や、金城への温子嬢の秘めた思い、書院での生活、「上海南市の三菱造船所に動員」（二六枚目）、戦後の「をばさん」たちの引揚げ、また自身の熊本への引揚げ、長崎での再会、自身の沖縄への帰郷、温子嬢への長文の手紙（映画や短歌について）が順に記されている。

【四二枚目】現実のきびしさにまともにぶつかれば死のみです。現実の命に従ふリアリズムと、またこのきびしさにめげて頽廃しないだけのロマン【四三枚目↓】チシズムを適度に持して行くことが今後の日本民衆の生活目標だと思ひます。強く、強く、美しく、そしてそのやうに周囲の人々をも化すべき迫力をもつて生活して下さい。

「月の夜がたり」の語り手「大城」は上海で世話になった家族の娘温子嬢にこのような手紙を送る。記述内の主な登場人物はこの家族と同級生の川崎である。[16] 本作は、客観性よりも主観的感情を主として記されている点に特徴がある。『朝、上海に立ちつくす』では友人織田、朝鮮出身の金井、台湾の梁、中国人の范家族との関係、そこから浮上する自己同一性への問いが語られていた。だが未発表原稿では主に自らの〈青春の記録〉が記されているような印象を受ける。登場するのも上海に住む日本人ばかりで中国、朝鮮、台湾人は現れない。民族的な葛藤という問題意識の前景化をここに見ることはできない。つまり、ここでは、大城が東亜同文書院在学時に、経験したかもしれない民族的葛藤や衝突、また軍隊での詳細な体験は省かれ、「少女趣味に近い」感傷的な記憶が、故郷の地から想起され、記録されているのである。いまだ未分化なままに記憶が記されている印象の「月の夜がたり」は、大城の執筆の最初期の、あるいは〈小説〉家として飛躍する以前の核の部分を示唆するものであるだろう。

大城は、『朝、上海に立ちつくす』に関して、「「蘇北機関」とよばれた陸軍の情報機関に、勤労動員で沖縄と東京、朝鮮、台湾の出身者がそろったのは、出来すぎのようだが偶然のモデルの実在する事実であり、「私の思想形成に役立っている」と述べ、「「お前たちは、朝鮮で日本の官憲がどんなに悪いことをしているか、知っているか」と「金井」は息巻き、絶対に独立してやる、と揚言した」と当時を振り返るが、[17] 帰郷後の大城にとって、東亜同文書院で出会った「他民族」と、独立や分離といった戦後状況への距離はまだ遠く、[18] 文学的立場の決定は未決の状態であったことがうかがえる。松下優一が指摘するように、「１９５０年代の〈沖縄文学場〉における論争（「琉大文学論争」）において、新川明の批判を受けて彼が主導する社会状況を告発する文学に対し、大城は文学的自律性を目指す立場を取」り、「政治的ラディカルさを要求する「社会主義リアリズム」とは別様な文学を確保」する姿勢を示すも、芥川賞受賞により、「距離を置いたはずの政治的メッセージ」へと接続していく。[19] 多くの作家がそうであるように、大城も時代状況と自らの文学観を衝突（論争）させながら、〈沖縄〉という意味を積極的に見出していった。その端緒として、〈上海〉体験を記した「月

の夜がたり」からは、大城の感傷性が積極的に見いだせた。〈一九四七〉から、一九八三年までの時間的距離において、「カクテル・パーティー」[20]に顕著なように、基地の島〈沖縄〉という土地性を根拠としつつ、戦時下の民族の立場を図式化しながら[21]、その葛藤を描くにいたった。したがって、「月の夜がたり」から『朝、上海にたちつくす』との間に見いだせる飛躍、差異は、〈東京〉を代表する織田や〈台湾〉の梁勝雄の登場と関わり、とりわけ視点人物知名雅行が、〈日本人〉という付与性と所与性（後述）の問題を考えるきっかけを与えた〈朝鮮〉の金井恒明に見出せるのである。

「月の夜がたり」において「少女趣味」的に思いのままに記された上海、「東亜同文書院」の記憶に、「作家的想像力」、文学的立場、アイデンティティの問題が加味されることで〈小説〉としての『朝、上海に立ちつくす』は成立しているのである。そこで、次章ではこの金井に焦点を当てていく。

三、〈民族〉問題の不問化をめぐって

先行研究にもあるように[22]、本作における問題としてアイデンティティが浮上する。だがそれは最初期の「月の夜がたり」が不問としたからこそ、大城の文学活動の輪郭と中身を強調するものとして捉える直すことが出来る問題でもあるのだ。

視点人物知名雅行は沖縄出身であることが明示される。では知名の中の沖縄とはいかなるものなのか。大城立裕は「私は一九三二（昭和七）年に小学校の一年生になったのだが、それから一九四三に旧制中学校を卒業するまで、一日として（誇張ではない！）「標準語励行」の枷を忘れたことはない。教師たちのエネルギーの半分は、おそらくこの標準語励行のためにささげられていたのではないだろうか[23]」と述べ、「標準語」による画一化と〈同化〉への運動に参加した自己を表明する。大城自身が仮託された視点人物知名雅行も〈日本人〉であることを自明視している。しかし沖縄の教育現場で行われた「方言札[24]」に顕著なように、強権的に「標準語」圏内に内部化されながら、本作では他者の〈まなざし〉からは自由になれない。それは内地の人間の無意識、例えば作中、根岸や荻島夫人の何気ない言葉に反映される。

東京出身の後輩根岸に「知名さんは、沖縄出身だから、そんなに支那語がうまいのですか」と尋ねられた際には「慌てずにごまかして」いる（三七頁）。また書院の先輩荻島家の食事会で、次のような夫人とのやり取りもあった。

「そうね。沖縄の料理って、支那料理に近いんでしょうからね」／夫人は、すこしずれた言いかたをした。それを違いますと言うのも億劫になって、何でも頂きますと言ったのだが、それで答えになったかどうか。（八五頁）

さらに中国人の「范徳全は琉球人である知名をなかば同胞だと思いたがる節があり、その点がまもなく日本の兵隊になろうとしている知名には感情的に処理しにくいことではあった〔…〕」（一七九頁）とある。「ごまかし」「億劫」「処理しにくい」と考える知名は、他者が概念化する沖縄と向き合わない。このどれもが知名の中での不正解だとしても、彼は同化した〈日本人〉である自己に拘泥しながら、沖縄に対して失

語的になっている。

知名と金井の議論の中に以下のようなやり取りがある。

「沖縄県人は独立運動をやっているか」／「僕たちには、その必要はないのだ」／「なぜ？」／「なぜって……」／知名は困った。金井が朝鮮人として沖縄の歴史をどのように理解しているかは知らないが、沖縄県民が独立ということを考えなくなってから、もう百年に近い。それどころか、中国へ来たおかげでというか、同文書院という学校に来て朝鮮人や台湾人とつきあったおかげでというか、そのような話題にめぐりあったことさえ、意外なのだ。（六〇頁）

知名雅行は他者からの〈まなざし〉に敏感である。それは彼が明治帝国日本に遅れて版図化された沖縄を抱え込みながら、〈同化〉という物語を内在化しようとする意思と通底する。しかし他者の沖縄への理解と、知名の考える〈同化〉の物語との間には齟齬がある。したがって〈日本人〉なのだという自己認識が強固であったとしても、〈日本人〉という領域内における同一性は、他者を介して常に揺らぐ可能性が示される。そして、知名の信じようとする「東亜同文書院」の理念も、金井や梁という植民地出身のアイデンティティとの葛藤から自ずと揺らいでいくのだ。

知名は、作品冒頭にある「軍米収買」の際、友人織田を思う。織田は「いっぱしの社会主義者を気取ってみせたかと思うと」（一四頁）、中国語の春本を音読したりする人物である。新城郁夫は織田に注目し、「主体性の不安にさらされ続ける知名の言葉によって、常に安定した主体性を付与されていくとみえる織田であるが、この織田こそが、知名の欲望の真の宛先であり、小説全体を規律化する欲望の編み目の中心であ」り、「それぞれに割り振られた民族的葛藤を秩序正しく抱えこんでいくこの小説にあって、ほとんど葛藤らしい葛藤を持た」ない存在だと指摘する。[25] 大日本帝国の首都東京と切り離せない存在として、その中心性を示しながら「超然と」ふるまう織田は確かに知名の欲望の「宛先」である。一方、「民族的葛藤を秩序正しく抱えこ」むとされる金井もまた、「作家的想像力」が駆動し「虚実をつらぬいて」[26] 描かれている興味深い存在であることは否定できない。

織田と金井の間に発生した銃の暴発事件と、知名や鈴江教授が呼ばれた憲兵による金井の調査の後、知名は金井と会い議論をする。知名は尾崎秀実の『現代支那論』を読んでいたが落ち着かず、金井に会いに行くと、彼は大川周明『皇国二千六百年史』を読んでいた。その理由を「日本人だからね」とした金井に、「しかし、僕はまだ読まない」と知名は答える。「日韓併合」において付与された〈日本人〉を意識化しながら、「日本人だ」と述べる金井と、付与性を所与性に代替することで既存の〈日本人〉であることを意識化する知名。〈日本人〉であるからこそ、「まだ」読まないという知名は、しかしこの金井との関係において〈日本人〉としての自己肯定の試みと揺らぎを体験するのである。

「日本人になりたいというのは平等を望んでいるだけだ……」／金井は知名の顔をまっすぐに見た。「民族が別物だということは、はっきりと意識している。兵隊に行くことは殺しあいに参加することだ。そうなると、朝鮮人と日本人とが殺しあうイメージは浮

かんでも、この二つが一緒になって支那人を殺すということは考えられない」（六六～六七頁）

兵役も徴兵延期撤廃も、当然のこととして単純に受けとめている。徴兵忌避などということは、明治時代の沖縄にあったということを昔話のように聞いてはいるが、今では思いもよらないことだ。朝鮮人から沖縄人がどう見えるかは分らないが、すくなくとも知名はそんな難しいことは考えない。（六七頁）

徴兵を〈日本人〉として前提化する知名は、金井の「日本人だから」、「日本人になる」という被植民者としての民族性の根底を知ることになったにも関わらず、「日本人になる」ことが出来なければ不平等を強いられるという条件が被植民者金井にはあり、民族の差異を意識しながら、「僕は朝鮮人だ。しかし……」（六五頁）と揺らぐ複数のアイデンティティの葛藤に対して、自己の同一性を「難しいことを考えない」という解答とともに単純化する。しかし、ここには知名の変化の兆しもある。金井との会話の中から、「沖縄出身だからそうであるのか、日本人一般にそうであり得るのか、よくは分らないが、なにかひどく連帯感のようなものを感じている自分を発見し」（六七頁）ていくのである。

近代明治政府成立以来、「国民」という物語[27]に参加する／させられることで、沖縄人は所与的な民族性を、付与的に与えられた〈日本人〉という枠組み内部に組み替えてきた[28]。その付与性を自明視してしまうことへの疑義は、「月の夜がたり」の「大城」には不在の、本作「知名」に与えられた重要な思考の在り方である。「月の夜がたり」と、一九八三年の『朝、上海に立ちつくす』の差異は、〈日本人〉に含まれた〈沖縄人〉の在り方への問立てであるといえる。その問立てが、〈沖縄〉を掘り下げる上で不完全であるとしても、大城が意図したのは原体験の中に芽生えていた、と仮定される〈民族〉意識への接触点としての上海体験であったのだろう。その意味で「月の夜がたり」が描かなかった上海と、『朝、上海に立ちつくす』が描いた上海の差異から、大城の作品化の意味の一端が見出せる。

四、図式化した登場人物の考察——金井恒明を中心に

知名は「民族というものについて考えを固めるために中国の地と書院を選んだ、と金井は言うが、それは（恋人が異民族だから—引用者）皮肉にも裏目に出たのではないか。結果からいえば、むしろ混乱を深めたようだ」（六八頁）と考えている。それは知名の故郷の恋人新垣幸子が「日本人だから」幸福だという論理と表裏をなすものでる。

新垣幸子は幸せだ、という思いが湧いた。（中略）新垣幸子が日本人であり、自分も日木人である、ただそれだけであって別のものではない、日本人同士で愛しあう仲であること、それだけで幸せである、と思った。（一一三頁）

この場面の後、知名は、親しい中国人女性范淑英と自分の関係を考え、〈日本人〉として淑英と対すること、他民族ゆえの距離感の意味を問いながら答えを出せないでいた。その答えは金井へと反射し、彼の中から見出そうとされる。

金井には結婚を考えた女性、荻島多恵子がいた。書院の先輩でもあ

る「福泰公司」で働く荻島幾治の娘である。荻島は暴発事件の際にも、金井を援助しようとしたが拒否されている。それは暴発を通して、〈日本人〉と〈植民地／朝鮮人〉としての自己の、政治的隔絶を目の当たりにしたからであり、金井の「日本人だからね」という認識を空疎なものにしたことが露呈したからであった。

金井が、絶望でも後悔でもないが、きびしい拘泥として抱いているものを、知名はよく分るような気がした。ただ、その分りかたをうまく説明できない。金井の恋の、壊れようとして、壊すまいとしながら、いまの瞬間どうなっていくのか、どうしなければならないのか分らない、その気持ちをこそ理解しなければならないような気がして、知名はなにかしら、ひどく追いこまれた。（六三頁）

ここには植民地表象に理論が見いだせる。[29] 植民者としての〈日本人〉と被植民者としての〈朝鮮人〉、そこに〈植民者・男／被植民者・女〉ではなく〈植民者・女／被植民者・男〉という性が与えられることで、「安定」した性環境は揺らいでいる。新垣幸子との〈日本人〉同士の恋愛を遂行する知名は、しかし終戦の間際、「ある日本人の男」の誘いを断れないまま、ホモセクシャルな関係を持つことになり、ここでも「安定」した性環境は無化し、〈日本人〉であり、〈男〉という正当性に混乱をきたすことになる。

さて、金井は、多恵子と距離を置き、夏休みには〈朝鮮〉に帰郷するも、戻らないという予想に反して帰ってくる。その後、知名（沖縄）、織田（東京）、金井（朝鮮）、梁（台湾）は同じく「揚州機関」で働くことになる。この構図は大城が述べたように事実であった。だがここに交わされる知名／金井の会話は、〈民族〉問題を前景化させるための、「虚実」交じるものとして捉えてもよいだろう。

金井は、考えを纏めるように、あるいは決意を深くするように、わずかの間をおいて、「東亜同文書院という学校は、日本のつくった宿命的な傑作だと思う」／「どういう意味だ？」／「日本と支那との固い結びつきを象徴するものでありながら、その脆さもそこに象徴的にあらわれているという気がする」（一五五頁）

「東亜同文書院」への問立ては興味深い。なぜなら知名は、書院の「大旅行」を肯定し、「もともと書院生同士に差別がない」（三四頁）という認識や、「かずかずの寮歌にも唱われているように、欧米の侵略から中国を護る、そしてそれは日本と運命を共にするものだ、ということは正しいに違いない」（一七六頁）という考えが根底にあるからだ。軍米収買で感じた「贋」という感覚は、書院の「真」と呼応する。だが金井が見抜いた「宿命的な傑作」という言葉は、書院が本来持つ民族の複層性を偽造された「平等」として覆い、侵略に正当性を与えるものとして金井には見えただろう。知名は、「真」が反転する場において、「贋」であり続けなければならない不安定な存在となる。〈沖縄人〉としての自分が不問にしてきた付与的な問題――琉球処分、徴兵制、言語教育に関わらなければならない。その意味で、金井は、知名の同一性を攪乱する存在なのだ。知名が不問にしようとした問題を図らずも問いかける存在として金井はあらわれるのである。しかし、戦争終結後、知名は行方知れずとなった不在の金井の周囲で空転するようになる。

大城は、戦後最初期に発表された「望郷」においても朝鮮人を描いている。しかし、そこでは祖国を取り戻したにも関わらず帰郷できず同胞同士で争う者として描かれ、故郷へ帰ることが可能な沖縄人を対照化させていた。[30] 一方『朝、上海に立ちつくす』では朝鮮人金井の存在を民族として捉え直している。知名自身を解くカギとして希求された金井は、だが不在となることで、残された知名の〈民族〉性への問いを先鋭化させることになる。

「とうとう独立したね、と知名は第一声で挨拶したが、金井はそれに対して、ああと一言応じて微笑しただけであった」（一八八頁）のはなぜか、結局は多恵子と離れて姿を消したのはなぜか。「朝鮮人で書院生で軍隊へ行った。これで彼が混乱しないはずはない」（二一〇頁）と荻島は述べ、「原罪」と口にする。知名の「原罪」という言葉への違和感は、〈日本人〉が持つべきものだったと言い換えられる。だがここでも、金井は不在であり、知名の彼への問いは宙吊りのままとなる。金井は、朝鮮へ帰ったのか国民党、共産党のいずれかに参加したのか、行方は分からない。「金井も日本人にはなりたかったのか。そして軍隊に行ったのか。いや、軍隊には行きたくないと言っていたはずだ。では、なぜ梁のように敵前逃亡をしなかったのか。その埋めあわせのために、戦後になって逃げたのか。しかし、今更何から逃げたというのか。どこへ逃げたというのか」（二二五頁）、「金井恒明がすでにその故国に突っ走って行ったのではないかという幻想が、突如として湧くことがあった。／その運命ははじめから分っていたことである筈なのに、なぜ多恵子さんを愛したか、彼女の愛を受けいれたのか」（二二六頁）、「女から逃げたというのでは通俗にすぎる。では、兵隊へ行った罪の償いに女を拒否するというのか。――知名のなかをこのような想念がはしった」（二三六頁）など、知名は不在の金井をめぐって「解答」を模索している。一方、織田や書院の先輩真木には金井への関心はそれほど見られない（「二人ともそれぞれに金井のことには熱心になれないようだ」（二四五頁））。

知名が思考し始めた〈民族〉の問題をめぐっては、彼自身の内部にある〈日本人〉という自明性が、金井という他者への投影を通して前景化するきっかけを示しながら、一方で金井が不在であることで解答は遅延される。したがって、例えば沖縄の空襲という事実、さらには地上戦を通して、なぜそのような無残な戦場と化したかへの解答を与える思考は、知名の中に拡充しない。

戦後になり、范淑英の兄、景光は知名に向かって「東亜同文書院は中国の敵だ」と宣言した。その上で、中国に対する金井や知名の戦後の在り方に期待した。ここには「真」としての書院の否定があり、また民族性と葛藤した金井と同じ地平に立つ知名が期待されていた。不在の金井の代りに、その在り方が問われるのでった。

ここでま『朝、上海に立ちつくす』をめぐって、原体験としての記憶（「月の夜がたり」）との大きな飛躍に、朝鮮人金井の存在を見出し着目した。「作者の現在の自己確認（沖縄へのこだわり）」は、一九八三年までの時間の蓄積の中で多様に変化したはずだが、この作品では過度な自己認識よりも、そこへ接続する「場」としての書院が着眼されたのであり、大城立裕の思想形成の過渡期を現わしたものと

して読めるのである。[31]

五、おわりに――大城立裕の上海、「東亜同文書院」

『朝、上海に立ちつくす』という作品は、金井を通して気づかされる〈民族〉問題へのアプローチを示しながら、不在の金井を希求し空転する点に特徴が見出せた。

本作には「書院生は加害者の立場に立たざるをえなかったとの自覚は読み取れるが、戦争そのものを否定する姿は見られない[32]」という指摘がある。大城自身も、書院に対する竹内好の文章「国家が侵略行為に出るとき出先機関がそれから自由であることはできない。しかし、そのために出先機関だけが侵略者よばわりされるのは不当であろう。いわんや東亜同文書院は、国家との一体化を歓迎すべくあまりに複雑な伝統を負っていた」（『日本とアジア』筑摩書房。一九九三・一一）を受け入れている。

上海や書院という場は、大城にとり「苦渋」でありながら「幸福」な場であった[33]。作品執筆において「焙りだされた私の悔いや誇りや甘え」は「日本のそれとあるいは重なっているかも知れない」と自覚する大城にとって[34]、本作はその加害者性の追求よりも、〈日本人〉として学んだ書院の上海体験を、〈日本人〉という付与性の揺らぎを通して表出したものだった。「少女趣味に近い」「月の夜がたり」が示したような上海での原体験の後、作家としての「立場決定」をめぐり、それでも「上海体験」を通した、「完成形」ではない過去の〈自己〉が表出されたものとしてここでは評価したい。

「東亜同文書院」、あるいは書院の「院子」は、「まばゆいほど新鮮」で「広い芝生は萌黄色に張りつめているし、その周囲にめぐるプラタナスの並木、その向うにそびえる赤煉瓦の建物の色合いなどが、よく調和」する場所であり（三四頁）、「軍隊にいれば生活は保障されるが、上海に戻れば自分の生活を取り戻せる、と思った。いや、それほどの理屈もなく、ただ上海が恋しかったのかも知れない」（一八五頁）と思える場所としてある。

戦後に『改造日報』が実施した在留邦人の意識調査をめぐり、荻島と知名は「書院出身だと思われる人のなかに、自分のこれまで持ってきた思想に反省のない人が多い」／「つまり同文書院は侵略者ではなかったという……」（二三五頁）という会話が交わされる。「侵略者」であるということ、同時に書院の学生であることは「苦渋の幸福[35]」として、大城には認識され続けたのだろう。

大城が振り返る上海の根底部分には「少女趣味に近い」感傷が明らかに存在した。「カクテル・パーティー」や『小説琉球処分』（講談社、一九六八・一）他、多くの作品で沖縄の現状や歴史を捉えながら、また前者においては「加害者性[36]」を突きつめた大城の思想が評価できた。そして、その出発点をなす〈他者〉との出会いの場が、留学時代の上海であり、「東亜同文書院」であったことをここでは確認したい。したがって「青春の影絵」として書かれた本作は、一九八三年から、戦中戦後の上海に「いた」大城自身を覗きこむ作品であり、そこには原体験として刻まれた「少女趣味」的記憶がある。だからこそ強固な論理、倫理性において〈沖縄〉を腑分けできていない点に問題を見出すこと

は可能であったかもしれない。[37] しかし、例えば本作に希薄な「加害者性」から、「現在の自己認識」の不在を問題とするのは難しい。ここには出発点としての上海、原体験の記録「月の夜がたり」があり、その上海という多様な都市をめぐって思考された〈民族〉の問題への発展がある。明確な解答への到達が拒否されるように、上海に「立ちつくす」しかないのである。

【注記】

(1)『朝、上海に立ちつくす――小説東亜同文書院』(講談社、一九八三・五)、また中央公論社からの文庫版(一九八八・六)がある。本論の引用は講談社版を用いる。

(2) 大城立裕『恩讐の日本』(講談社、一九七二・五)

(3) 大城立裕「あとがき」(前掲(1)書、二六一頁)

(4) 大城立裕「中国と私」(『沖縄、晴れた日に』家の光協会、一九七七・八、二一九頁、初出『琉球新報』一九七三・一・一)、またここで大城は「「日支提携」のために中国語を習い、中国に関する学問を積んでいった私が、なんとなく物事を裏返しに見る態度を養われたとしても、無理からぬものがあった」と述べている(二二〇頁)。

(5) 大城立裕「年譜(試案)」(『青い海』一九七七・一二、一九〇頁)

(6) 前掲(1)書、二六一頁

(7) 大城立裕『沖縄――「風土とこころ」への旅』(社会思想社、一九七三・四、三〇頁)

(8) 黄英「大城立裕「朝、上海に立ちつくす」におけるアイデンティティ」(『Comparatio』二〇一四・一二、六二頁)

(9) 岡本恵徳「文学状況の現在――『朝、上海に立ちつくす』をめぐって」(『新沖縄文学』一九八四・三、一〇七、一〇九頁)

(10) 栗田尚弥『上海　東亜同文書院――日中を架けんとした男たち』(新人物往来社、一九九三・一二)、巻末年表を参照。

(11) 日野晃「解題」(『実録中国踏査記――上海東亜同文書院大旅行記録』新人物往来社、一九九一・一二)

(12) 佐々木亨「東亜同文書院入学者の群像――海を渡って学びに行った若者たち」(『同文書院記念報』二〇〇三・三)

(13) 藤田佳久『日中に懸ける――東亜同文書院の群像』(中日新聞社、二〇一二・三、一二二頁)

(14) 藤田佳久「東亜同文書院の中国調査旅行と書院生の描いた中国像」(『季刊地理学』一九九八・一二、二七九頁)

(15) 沖縄県立図書館蔵請求記号番号「OK／93／O77」

(16) 大学史編纂委員会編『東亜同文書院大学史』(滬友会、一九五五・七)の「第四四期生」(大学五期生)の名簿には「大城立裕」の名前の他「川崎」姓も記されている。また阿波根朝松編『琉球育英史』(琉球育英会、一九六五・六、二九頁)には、「経済金融界」の活躍者として大城の名前がある。

(17) 大城立裕「「他者」ということ」(大城立裕全集編集委員会編『大城立裕全集』第七巻、勉誠出版、二〇〇二・六、四〇七頁)

(18) 大城は戦後早い時期に発表された「望郷」(一九四八)について、

熊本闇市の「デスペレートになった青年たち」を描きながら、そこ登場させた〈朝鮮人〉について、「戦後いちはやく、朝鮮半島では、同胞が南北に分かれて対立をはじめていた。それを思うと、われわれ沖縄人はまだ幸せだ、という風に書いた」（大城立裕「沖縄で日本人になること」『同化と異化のはざまで』潮出版社、一九七二・六）と記している。ここには、〈朝鮮〉〈沖縄〉〈日本〉を含めた関係が示されるが、まだその問題を深く掘り下げるに至ってはいない。

(19) 松下優一「作家・大城立裕の立場決定――「文学場」の社会学の視点から」（『三田社会学』二〇一一・七、一一三頁）

(20) 一九六七年に芥川賞を受賞した「カクテル・パーティー」に関しては岡本恵徳、仲程昌徳や浜川仁、村上陽子らが考察を行うが、ここではそれら論稿をまとめた伊野波優実「「沖縄文学」と芥川賞――大城立裕「カクテル・パーティー」を読み直す」（『沖縄文化』二〇一七・四）を参照した。

(21) 鹿野政直は大城が登場人物に価値意識の人格化を割り当てるとし、「そのように演劇的効果への大城の執念は、登場人物をしばしば、作者の理念のあやつり人形然とする域にまで達している」と指摘する（「異化・同化・自立――大城立裕の文学と思想」『戦後沖縄の思想像』朝日新聞社、一九八七・一〇）。

(22) 黄頴「大城立裕『朝、上海にたちつくす』論」（『琉球アジア社会文化研究』二〇〇六・一一）、前掲（8）書を参照。

(23) 大城立裕「沖縄のナショナリズム」（『内なる沖縄――その心と文化』読売新聞社、一九七二・五）

(24) 本永守靖は「標準語励行の強行手段として沖縄各地の学校で用いられた罰札。方言を使った生徒に〈方言札〉と書かれた木札を渡し、これを持った者は、方言を話している他の生徒を見つけて手渡していくという決まりであった。（中略）明治四〇年ごろからおこなわれていたようである〔…〕」（「方言札」『沖縄大百科事典』下巻、一九八三・五、四四四頁）と指摘する。また近藤健一郎編『方言札――ことばと身体』（社会評論社、二〇〇八・八）も参照した。

(25) 新城郁夫「大東亜という倒錯――大城立裕『朝、上海にたちつくす』」（『沖縄を聞く』みすず書房、二〇一〇・一二、一三五頁）

(26) 前掲（1）書、二六一頁

(27) ベネディクト・アンダーソン／白石隆、白石さや訳『想像の共同体――ナショナリズムの起源と流行』（リブロポート、一九八七・一二）、ましこ・ひでのり『幻想としての人種／民族／国民――「日本人という自画像」の知的水脈』（三元社、二〇〇八・五）などを参照。

(28) 例えば、石田正治は、明治から昭和を代表する沖縄の言論人大田朝敷について「社会的文化的な「同化」こそが、この（他府県に対する―引用者）後れを取りもどす「第一の手段」であると主張した」と述べる（石田正治「大田朝敷における愛郷主義とナショナリズム（一）」（『法政研究』一九九九・一二、八八七頁）。

(29) サイードの『オリエンタリズム』（今沢紀子訳、板垣雄三、杉田英明監修、平凡社、一九八六・一〇）をふまえながら、例えば新城

郁夫は「ポストコロニアル研究の多くが指摘するように、征服された土地が「女性的」な表象において覆われ、征服者と被征服者との関係が、異性愛モデルにおいてアレゴリー化される事態は、植民地主義言説におけるステレオタイプとさえ言える」と指摘する（前掲（25）書、一三二頁）。

（30）ここでは花田俊典「疎開者たちの沖縄――大城立裕「望郷」の後景」（『Comparatio』二〇〇一・三）を参照した。

（31）本作には「一見中国人と連帯と信頼を持っているように見えるが、実はどこかで断絶しているのではないか」（朱虹「近代日本文学における上海――大城立裕文学を中心に」『琉球アジア社会文化研究』一九九八・一〇、三四頁）という知名への評価がある。また山本正幸は、貧困者の多い「江北人」に着目し、作品最後の場面をふまえながら「〝文学的〟なレトリックは、江北人＝水上生活者の現実を抑圧し否認することに奉仕している」とし、抑圧を不可視化する大城のレトリックを指摘している（山本幸正「水上生活者と文学（3）――大城立裕『朝、上海に立ちつくす』における「江北人」をめぐって」『アジア・文化・歴史』二〇一七・五、七三頁）。

（32）黄頴「大城立裕『朝、上海にたちつくす』論」（『琉球アジア社会文化研究』二〇〇六・一一、二七頁）

（33）前掲（17）書、四〇八頁

（34）前掲（1）書、二六一頁

（35）前掲（17）書、四〇八頁

（36）大野隆之は、鹿野政直（前掲（21）書）の指摘した「カクテル・パーティー」の意義、「一五牛戦争において沖縄もまた加害性を免れなかったこと」を示し、「その加害性を償おうとする行為こそが、抵抗のバネにな」り、「そうした抵抗の根底に沖縄的なるもの＝固有の価値の擁護を置き」、「同時に沖縄人に向かって、悲哀に陶酔するとからの脱却を呼びかけ」た作品だとする評価を受け、「大城立裕の思想その可能性」への言及だと評価する（「大城立裕「カクテル・パーティー」を読み直す――文化論としての「カクテル・パーティー」」『沖縄文学論――大城立裕を読み直す』編集工房東洋企画、二〇一六・三、六六頁）。

（37）例えば黄英は「大城が日本人としての痛々しい青春体験を語ろうとしても、沖縄は避けられないもの、内在化されているものとして表象されているのである」「（大城立裕「朝、上海に立ちつくす」におけるアイデンティティ」（『Comparatio』二〇一四・一二、七四頁）と評価する。

【本研究は愛知淑徳大学特定課題研究（２１ＴＴ０９）の助成を受けたものです。】